か　ん　れ　き

旧制16期　近藤　誠

【一体これはなんなのだっ！ふざけやがってなにが還暦だっ！なにが満60歳だっ！この俺が忘れている齢を再確認させるつもりなのかっ！　伜どもが勝手に集まって，飲んで食ってわいわい大騒ぎして，こちとらは，すっかり肴にされ唖然とするばかり…，面食らっているうちに，訳も解からない孫にまでも〔お爺いちゃまおめでとう〕とかなんとか言わせて花束をくれた。

こんなことになるのならいつもの赤提灯で，粋なおかみと一杯やって帰えるんだった。

しかし，あの連中，俺の弱点を衝いて孫まで出演させて，そんなにしてまで俺のためにセレモニーをするからには，俺もちょっとは考えねばならんだろう…と気がついた途端，シューンとしてしてしまった。

いいかげんにして，落ち着いて静かにしていろとでも言うのか？エンストを起こさぬようにこの付近で充電してくれたのか？思案のしどころだ。しかし参った。今，自分を襲っている自解できないこの感情を整理しなければ…とボーッとしているうちに飲みすぎた酒が助けてくれて眠ってしまうことができた。

今朝，遅い目覚めの床の中で考えてみたら簡単なことだと気がついた。昨日と今日とはちっとも変ってはいない。単に齢60年を重ねただけと単純に考えることにしよう。お前え等に踊らされてたまるものか！　とは言え，親爺の生き方が変わることがないぐらい百も承知の上で，あんな大騒ぎをしてくれたお前え達を，心憎くもまた好きになってしまった。あの一瞬の心の慟哭はあったにしても…。お前え達がどう望もうとも俺はいままでどおり「チョーゴ，レゴレ，チョゴレゴレ…」七夕気分の生き方を続けて行くだろう。皆んな！宜しく頼む。

贈ってくれたのが，赤いチャンチャンコではなくて，早稲田カラーのエンジ色のベストだったのがベラボーに気に入ってしまった。

そんなお前達の気遣いに，「やるな！おぬし等…」　嬉しかったよ。ありがとう。】

※　還暦を迎えた翌日の日記の転記です。旧制16期生は皆んなこんな年頃のようです。

昭和15年たしか107名入学，ＡＢの二クラス，昭和20年勤労動員先の相模原陸軍造兵廠で卒業証書が藁半紙謄写刷りの卒業でした。

卒業を待ってくれずに，２年生～５年生の途中で海兵・海機・海計・陸士・幼年・予科練・特幹などで半数を超える同輩が学舎を中断して征かされる時代でした。上級学校への進学者も進学早々予備学生など学徒出陣で，なんとも言い難い時を強いられました。相当の物故者もおります。

卒業までの期間を残して途中で軍途に就かされたため，敗戦後，生残って帰校復学した同期生諸君は，軍隊に駆り立てられたあげくの敗戦で，裏切られた鬱憤と虚無憾に襲われ，忘我自失の一時を母校で過ごしたのかも知れません。そんな時代でもあったのです。

二度と後輩達にあの思いをさせてはならないと云うのが我々同期年代の一致した感情じゃないでしょうか。

それだけに，平和な現在の母校に対する羨望からも，母校愛は人後に落ちないものがある筈です。

毎年秋頃，秋田県内，地区別の持ち回りで盛大に同期会をやっていますが，残念ながら東京地区は開らくまでには至っていません。是非実現したいものと思います。６～７名は在京の筈です。

東京同窓会の堅実な発展を祈ります。

小生，公務員退職後，現在民間会社で隠居仕事に就きながら，民生委協・青対委・福祉協・早稲田

町々会会長など，ボランティアで結構多忙の毎日　を過しております。

新制8期生の状況

新制8期　八柳　昭義

昭和45年に初めて10名が参加して同期会を作り，それから毎年春と秋に同期会を催し，会員も少しずつ増えてきたので，能代の同期生と協力して，同期生全員の名簿を50年8月に作成，この時の調査で関東地方在住者も急増し，約60名となったが転勤等で多少移動があり現在59名となっています。

51年から東京同窓会に参加するようになり，春に同期会，秋は10月の総会を集まる時にし，その他に毎年関東地区同期会名簿を作って変動を知らせています。

同期会を始めてから17年が過ぎ，同期会の活動は幹事の私が地方へ転勤したりしてここ2，3年ちょっと休業状態でいたが，その間に会員を元にして能代一中，能代二中と中学校の同期会が出来て活動するようになりました。

同期生というのは，卒業した時からもう増える事がなく，年と共に少しずつ減ってゆくばかりです。同期生の誰もが会った時に云う事は，現在どんな状態でいようと，俺，お前と呼び合い気兼ねなく話が出来る随一の集まりだと云います。仕事を離れた交際が出来る場や友人が居るというのは貴重なものです。又先輩後輩との付き合いをする事で，仕事上の事などはもちろん，自分の視野を広める事にも役立つものです。同窓生同期生との付き合いを大事にして欲しいものです。

威気高し　新制11期生

新制11期　太田　勝治

年に一度の東京同窓会の総会には，年々参加者も増え，ますます盛会になって来ていることは大変うれしいことです。

そのような中で，わが新制11期生（昭和34年3月卒業）は，参加者が一ばん多いので，それなりに東京同窓会に微力ですが寄与できる，ことは喜ばしいことです。

新制・旧制を通じて各期それぞれの参加者数は4～5名ですが，新制11期生は15名位の参加者数です。これは出席者全体の10%にもあたります。

懇親会の余興の席では，他の期の方は，いくつかの期をよせ集めないと，壇上いっぱいにならないのですが，新制11期生の場合は，参加者が15名位ですので，単独で壇上いっぱいになり，応援歌を歌うのです。

他の期の方々はうらやましそうにしてみていますが，参加者をここまでふやすことができたのは，やはり，同期生たちの努力があったのです。

今から6～7年位前ですが，東京や近県にいる同期生を中心に会をもとうということになり，宮腰瑞夫君，田中善明君，宮腰興紀君，伊藤正男君その他の同期生達が中心になって123会（ひふみかい）第一回会合をもちました。第一回目の会合が1月23日だったので123会と名づけたのです。

この123会は今まで年一回会合をもち，仲間が仲間を誘い合って今日まで続いております。参加